

立教大学文学部一〇〇周年記念行事における 学生の活動について

安藤 文子

(立教大学教務部人文科学系事務室 課長)

立教大学文学部の歴史

立教大学文学部は二〇〇七年に創設一〇〇周年を迎えました。大学の歴史は、一〇〇年よりもさらに前、一八七四年にアメリカ聖公会のウィリアムズ主教が、築地に立教を創立(私塾)したときまで遡ります。その後、一九〇七年に専門学校令により立教大学が認可され、商科と文科が設置されて、このときを文学部の誕生としています。それから一〇〇年が経ちました。

池袋には一九一八年に移転し、戦争中の一時閉鎖を経て、一九四六年にキリスト教学科・英米文学科の二学科で文

学部が再開されました。一九四九年に新制大学へ移行し、その後、文学部は学科を増やし、八学科となりましたが、二〇〇六年度に現在の学科体制つまり、キリスト教学科、文学科(英米文学専修、ドイツ文学専修、フランス文学専修、日本文学専修、文芸・思想専修)、史学科(世界史学専修、日本史学専修、超域文化学専修)、教育学科の四学科体制となりました。

二〇〇五年度までは、心理学科も文学部内にありました。けれども二〇〇六年に現代心理学科が新座キャンパスに創設されたこととともない、心理学科はそちらの学部に移りました。また、その学部の中に文学部の比較文芸・思想コー

スから発展した映像身体学科も創られました。文学部の歴史の中には、社会(学)科も存在したことがあり、現在は社会学部として独立しています。このように一〇〇年の間に文学部から生み出された学部が二学部あります。文学研究科内には、組織神学専攻、英米文学専攻、日本文学専攻、フランス文学専攻、ドイツ文学専攻、史学専攻、地理学専攻、教育学専攻、比較文明学専攻があり、心理学専攻は、二〇〇六年度に現代心理学研究科として独立しました。

以上が立教大学文学部の簡単な歴史ですが、この歴史の中に忘れてはならないものとして、一九七三年に「文学部集会開始」というものがあります。この集会は現在までも続いています。毎年一月半ば過ぎに、午後三時以後の文学部の授業を休講にし、文学部教員、学生、文学部関係職員が参加して、次年度のカリキュラムの内示を行う集会を開催しています。学生からの異議申し立てを受け付けるといふものです。これは一九六九年の学生紛争後に設けられた集会で、教員によるシンポジウムや講演も同時に行われてきました。

学生が大学運営に参加するというひとつのかたちが、ここにあると思います。学生は、次年度のカリキュラムにつ

いてだけではなく、さまざまな意見を言うことができます。大学院生から学会発表奨励金が国内の学会だけにしか支給されないことへの異議が出された翌々年には、海外の学会にも支給されることになり、図書の出し期間を長くしてほしいという意見には、すぐに図書委員会が検討に入るという具合です。そのような集会が三四年間続いて現在に至っています。

文学部一〇〇周年記念行事運営への学生のかかわり

文学部一〇〇周年記念行事は、二〇〇六年から二〇〇八年まで三年間にわたり開催しています。作家や専門家を招いての各種公開講演会や国際シンポジウムが企画の中心となっています。それらの企画は、主に各学科・専修から提案されますが、二〇〇六年度には、その中に学生からの公開講演会開催の提案がありました。

「一〇〇祭」という文学部の学生による文学部一〇〇周年記念行事実行委員会が立ち上がり、そのメンバーが公開講演会を開催したいと言ってきました。学生たちは何人かの講演会講師候補を考えていましたが、外部講演者とはスケジュールの調整が難しく、紆余曲折した結果、学内の候

補者であった鳥飼玖美子教授に講演をお願いすることができました。学生たちは、講演依頼の交渉、チラシ作り、当日の運営等に奔走し、「若者が求める人間関係」というタイトルの公開講演会を開催し、聴衆の評判も良く、無事に終了いたしました。

二〇〇七年度に入り、学生の活動は「豊島こども大学」という企画が中心になりました。この企画は、文学部一〇〇周年記念行事の一環で、立教大学・豊島区・東京芸術劇場(池袋)の連携プログラムです。

豊島区内の小中学生から「豊島こども大学」への応募をつのり、多数の応募者より抽選で四〇名のこどもたちが次のような行事に参加することになりました。

- ・開校式・立教大学の教室で、教員と学生が入学式や博士学位授与式のようにアカデミックガウンと帽子を着用し、雰囲気



ハロウィン

- ・近藤良平さんと遊ぶ・ダンスカンパニー主催者、近藤良平氏の指導のもと、大学の一〇〇〇人規模のタッカー・ホール全体(客席、ロビーまでも)が、電車ごっこの広場と化し、大フィーバー。
- ・豊島区宝探し・立教大学に隣接する江戸川乱歩邸をはじめ豊島区内の文化的スポットにこどもたちを案内して解説。
- ・メイクで変身体験・東京芸術劇場の舞台裏を探索。
- ・ハロウィン仮装行列・一般参加の方々とともに池袋の街と大学構内を仮装行列。
- ・区長と夢会議・豊島区議会場で小学生が区長に質問。

卒業式・立教大学のチャペルで
おごそかに。
このような一連の「豊島こども大学」のイベントは、二〇〇



卒業式

〇六年度の「一〇〇祭」のメンバーの一部が新たなメンバーを募集し、運営にあたっています。担当教員と打ち合わせをしつつ、それぞれのプログラムの準備をし、当日は、こどもたちの指導をしています。

「豊島こども大学」は、このほかに番外企画として六大学野球応援ツアーも開催し、こどもたちだけでなく、保護者も参加するイベントとなりました。

未来の声を聴こう

立教大学連続シンポジウム「未来の声を聴こう」は、このタイトルのもとに各学部が企画を立案しています。二〇〇七年度の文学部の企画は、二〇〇一年から始められた「立教映画人」シリーズで、一二月に富樫森監督の『天使の卵』を上映し、原作者である村山由佳氏に監督と対談していただく案でした。お二人とも立教大学文学部のご出身ですので、一〇〇周年記念企画にふさわしいゲストと考えることができました。

この企画は二〇〇七年の春には学内の広報に出しましたが、夏の終りに経済学部二年生の学生三名が、自分たちのゼミの課題である「学生以外の団体と協力し、携帯電話を用い

た動画配信を行う」というテーマに取り組むために、この「立教映画人」のPRと当日の対談内容の一部を、携帯電話で動画配信するという企画を提案してきました。

文学部長、企画・広報委員長と対応を話し合い、その結果、ゼミのテーマでもあるので、文学部として新しいPR方法を試みることは可とするが、対談の配信については、出演者のご判断を尊重すると決め、PR方法も含め、出演者の了解をいただくことを条件にしました。あらかじめ事務局から出演者に学生の企画を説明し、文学部の結論を伝え、学生が直接マネジメントの方に連絡をとらせていただいていた良いかどうかを確認した後、学生にまかせました。学生が進行状況を事務局に報告しつつ慎重に進めることとしました。

『天使の卵』の上映会と出演のお二人の対談は、二〇〇七年一月一日(土)に開催されました。学生たちはPRの画像作りから、かなりタイトなスケジュールで始めましたが、携帯によるPRの実現にこぎつけ、当日は、三脚にビデオカメラを据付けて、対談の一部を動画配信するための画像を撮影していました。学生たちの取材は、上映会開始前の会場の様子から始められ、彼らの記録は、今回の「立教映画人」の企画・運営のドキュメンタリーの意味を持つことにもなりました。

講演会レポートのニューズレター

これまでご紹介したような企画は、文学部一〇〇周年記念行事のほんの一部です。開催された多様な企画を半年ごとにとまとめたニューズレターの発行も一〇〇周年記念事業の中のひとつです。それぞれの講演会・イベントのレポートを、主にその企画を提案した学科・専修から推薦された学生に約八〇〇字でまとめてもらい、その編集、発行業務を、「St. Paul's Campus」という雑誌を発行している立教大学のサークルにアルバイトとして依頼しています。

文学部の企画・広報委員長と事務局、それに「St. Paul's Campus」のメンバーとで打ち合わせを持ち、諸経費、部数、タイトル、発行時期を調整しました。タイトルは「lit's」に決まりました。学生たちのアイデアです。

「lit's」はLiterature(文学)の略称ですが、動詞lightの過去分詞形で明るく照らされたという意味にもなります。このニューズレターを通して二〇〇七年に二〇〇周年を迎える立教大学文学部の輝きを学生の視点から発信していきます」と第一号に彼らは書いています。

ニューズレターのタイトル、レイアウト、レポートを執

筆した学生との編集作業上の打ち合わせ等、すべてを編集の学生が受け持っています。打ち合わせのために必要な執筆者の連絡先を編集担当者に伝えてよいかどうかの執筆者の了解までは事務局でとっています。

「lit's」は、文学部の在学生に配付するほか、全国約一三〇〇校の高校に文学部の広報として送っています。

以上が、立教大学文学部一〇〇周年記念行事運営への学生の参加と主な活動です。文学部一〇〇周年企画に対して、経済学部の学生が関わってきたり、「lit's」の編集も文学部だけではなく、他学部の学生も担当しており、学生の活動が文学部を超えてひろがっていることが、一〇〇周年記念行事そのもののひろがりとなり、大学全体の学生の関心や未来へのエネルギーを感じる機会となりました。



ニューズレター "lit's"